

ノ事ヲ知悉シテ居ラレハセンカト思フカラ同博士ノ御説ヲ拜聴スル事ヲ得バ誠ニ幸甚ノ至リデアル、又地方
デ此等方言ノアル事ヲ御承知ノ御方ガアレバ幸ニ御通報ニ預カラン事ヲ希望スル
又おしゃぐじでんだ、訛テおしゃごじでんだト稱スルしだノ一種ガアルガ此レハ其始メ信州ノ木曾デオシヤ
グジ（道祖神即チ石神）ノ鎮座セル森ニ生ジテ居ツタノヲ見付ケサウ名ケタトノ事デアル、此しだハ乾ケバ
葉ガくる／＼ト輪ニナリ圓イカラおしゃもじ（杓子）でんだト呼ブデハナイカト想像スルノハ中ツテ居ナイ

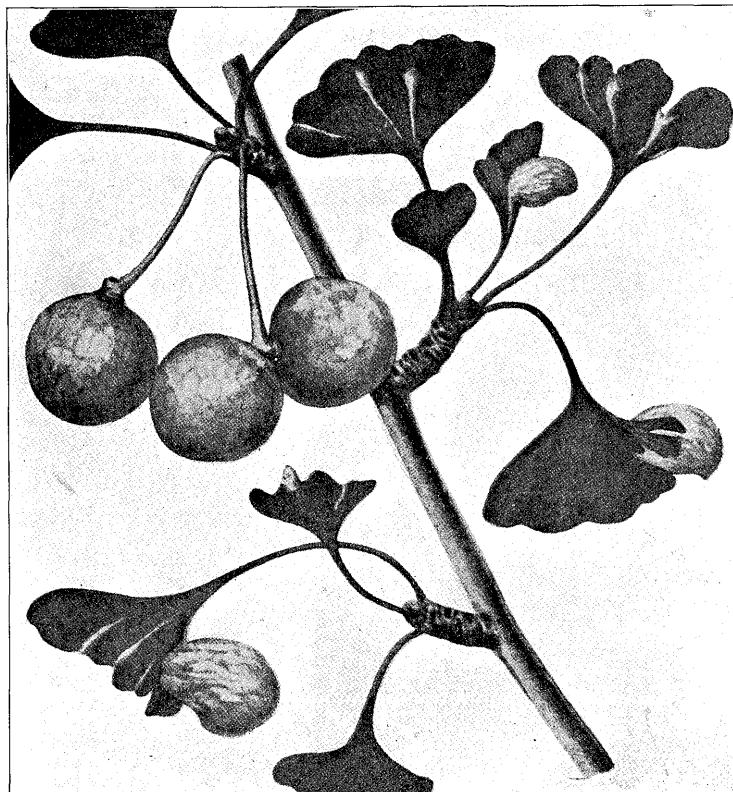
○謂ニユル御葉つき銀杏

向道坂

葉ニ實ガ生ル而モ大キナぎんなんガいてふ葉ノ上ニ出來ルノダカラ珍奇ナ事デアル、葉ニ實ヲ生ズル植物ハ他
ニモアル例ヘバはないかだ（*Helwingia japonica* Willd.）ガアルガ是レ等ハ餘リ問題トナラナイ、ソレハカノ
ロハ葉ニ實ガナル様ダガ、眞實ハ花ガ葉ニ宿ガリヲシテキル様ナワケデ花ニハ完全ナ雌藥ガチャントアツテ柱
頭ガ授粉シ胚珠ガ受精シテ果實ヲ生ズルノダカラ植物學上ナンデモナク單ニ葉柄ト花梗ガヒツツイテキルダケ
デ斷面ヲツクッテ顯微鏡デ見レバ葉柄部ノ維管束ト花梗ノ維管束トガ明カニ識別ガデキル、トコロガ本題ノい
てふノ葉上ノ銀杏ハト云フニ單獨ノ葉ダケデ實ヲ生ズルノデ決シテ花部ガ葉上ニ癒着シテ居ルノデハナイ其レ
ダカラ植物學上面白イワケデアル、而カモはないかだヤしなのきナドハ例外ナシニ葉上ニ果實ヲ生ズルガいて
ふデハサウハユカズニ日本中ノ老公孫樹（偶ニ若キ木）ノ中デモ十本タラズノ樹ダケガ枝梢ノトコロトニ葉
上銀杏ヲ生ズルノデ實ニ珍ラシイ現象デアル

甲州身延裏山ノ下山村上澤寺デハ古クカラコノ葉上銀杏ヲ珍トシテ身延山ノ七不思議ノ一ツトシ聖僧日蓮ノ靈

謂ユル御葉つき銀杏



御葉つき銀杏 (原圖ハ着色寫生)
(谷津直房、山内繁雄、神保小虎博士合著轉近博物通論教科書ニ據ル)

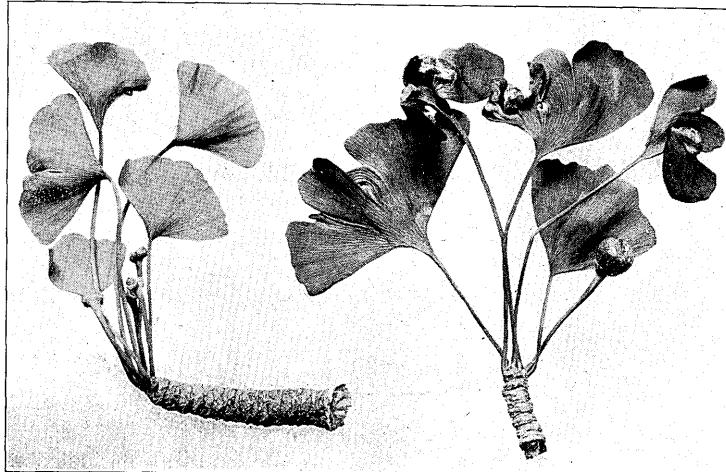
現トシテ寫眞ノ如クニ紙包入リヤ箱入りニシテ信者ニアリガタク受ケサシテ居ル、即チ『高祖御杖白犬靈木銀杏實』ト題シ婦人ノ乳ノ御符トシテキル、ソノ記事ニ曰ク「此の中にシ秋末一葉ノ地ニ落ツルモ南無妙法蓮華ヲ唱ヘテ寺僧ガ拾ヒ集メテ本堂ニ保存スルノデトテモ植物學ノ研究ニ枝ヲ折ルノ葉ヲ採集スルノナドハ許サレタモノデハナイ

左ニ上澤寺ノ縁起ヲ掲ゲテ見ヤウ

◆甲州下山上澤寺毒消靈木

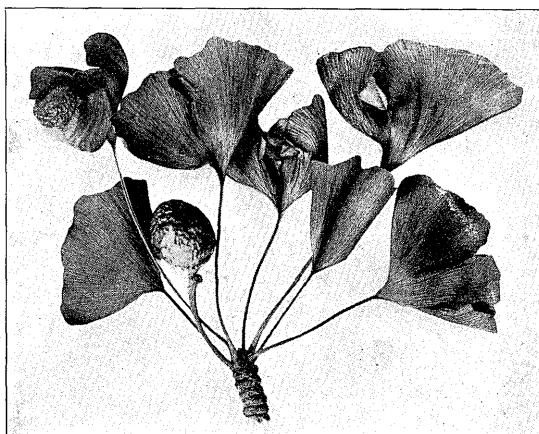
文永十一年皇紀一九三四年後宇多天皇の御宇高祖寶算五十三歳その五月十七日を以て當國身延山西谷へ御入山遊ばされし時小室山には

謂ユル御葉つき銀杏



甲州南巨摩郡下山村本國寺の御葉つき銀杏

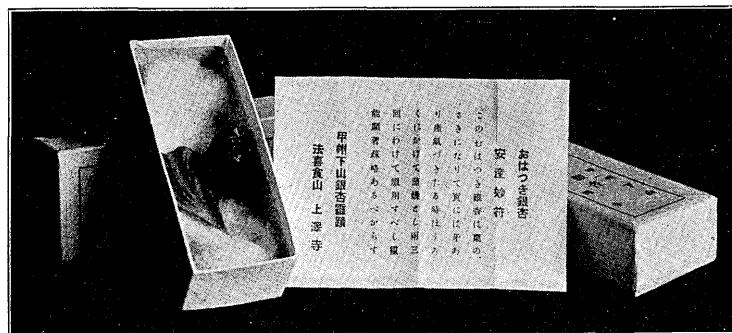
(昭和二年五月撮影)



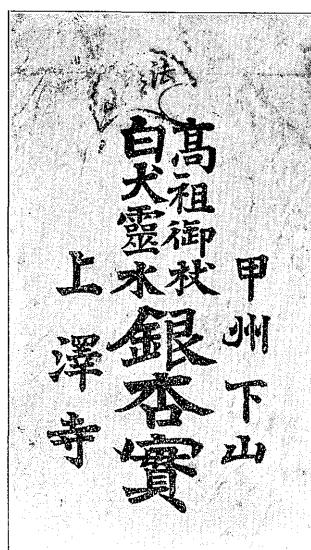
御葉つき銀杏

惠朝阿闍梨と稱ばるゝ僧あり眞言密宗の棟梁として關東八州に威勢を張り隨て當時上澤寺も亦眞言宗にして小室山の配下たり僧て高祖が西谷より御出遊となりて暫時甲信兩國の御教化をなされ給ふ時小室山にて惠朝と法論を試み給ひしに惠朝は法術を失ひて高祖の力を仰ぐより外に道なき絶對絶命の場合に差しるや無念ながらも一時其場にては歸服を表したるものゝ心にては伸々平ならずこの怨いつか晴らさん夫には身延と程遠からぬ下山に門下の法喜阿闍梨あるこそ幸ひいでや彼なば語らひて一味とせん、然なりと打首肯きこの旨此方へ知らせしに何し異存のあるべきや是れ又實にもと相祖打ち夫や此やとたくらむ間祖師には西谷御草庵へ御歸還あり時こそ到れと兩人は作り上げたる萩の餅の中へしだいかと毒含ませ仔細らしく打繕ひ誠意あり氣に鞠躬如西谷指して馳せ參じ口を山中の不自由なるに籍り媚を呈して献りしに高祖御覽ありて嬉と打笑み給ふ。時に何處よりもなく一頭の

謂ニル御葉つき銀杏



甲州下山村上澤寺ヨリ出ス御葉つき銀杏



甲州下山村上澤寺ヨリ出ス御葉つき銀杏ノ箱=貼付シアル名箋(端小)

銀杏靈蹟
法喜山上澤寺

甲州下山村上澤寺ヨリ出ス御葉つき銀杏ノ箱=貼付シアル名箋(端小)

銀杏靈蹟
法喜山上澤寺

銀杏靈蹟
法喜山上澤寺

白犬現はれて徘徊し尾を掉り首を低れて狎るゝものゝ如く祖師の下に近づく祖師之を御覽ありてその一片を采りて投げ興へ給ふ程に白犬欣びて之を口にするや候忽にして毒血迸發悶亂苦惱悲叫して號れしより惠朝と法喜とは顏色土の如く只管畏れかしこまり惡心の程仔細申立てゝ今度こそは眞實正心祖師の直弟ならんと誓ひしかば祖師には惠朝に對し名を日傳と賜り法喜に對しては其の名を日受と賜はる斯して日傳上人は小室川の開祖日受上人は當上澤寺の開祖となるこれより愈々信服隨從直弟子の榮譽を世々に貽す事となリぬこれにつけても悼ましきは白犬なりと高祖が西谷御草庵の畔に埋め之を弔ひ給ふの情頗る深きを見奉るや曩に己が企てたる罪業の深重なるを識り進みて高祖に願ひ奉りてその亡骸を請ひ受けこの上は幾分なりともその罪を輕めんものと篤く當山に薨る、この後高祖當寺に御來遊の砌り一本の塔婆を立てられ白犬の塚に向ひて親しく請御回向あり（高祖の立て給ひし塔婆は犬にあり）且つは御手にせる銀杏の枝を塚の上に立てゝ去り給ふ事あり不思議なるかなこの枝徐ら根を張り枝を伸べ孤塚の上に繁り立ちて世々の風露を凌ぎつゝ現に只見る如き大木となる周圍二丈五尺高さ十五間樹齡六百餘年眞に靈木たるの名に背かず然ればその葉もその實もその柯も悉く皆毒消妙符として全國の信者に頒け用ゐられ特に犬の牙に似たる實の『御葉つき銀杏』と稱ばるゝ尊崇亦一段なるは勿論天然物保存保護會よりは天下稀なる名木として推賞せらる參拜の人々請ふその心して拜せられよ

同村ノ本國寺ニモ同様ノ公孫樹ガアツテ此處ハ幸ニ寛大ニ採集ヲ許シテ吳レルノデ東京帝國大學理學部ノ名譽教授理學博士藤井健次郎先生モ卅年ホド前ニ此處ノ公孫樹デ研究ヲセラレ私モ再三御世話ニナツタ、トコロデ花ノナイ葉ニ何故ニ實ヲ生ズルカト云フノガ問題デアル、一體ニ被子植物デハ種子ハ必ず雌藥ノ子房内ノ胚珠ガ成熟シテ種子即チ實ニナルガ松杉ノ様ナ裸子植物デハ胚珠ノ附着シテ居ル心皮ハ開イテ子房ト云フ物（例ヘバ豆ノ莢、油菜ノ角ノ様ナ）ヲ形成シナイ、ソコデ心皮ト云フモノガアツテ植物ノ高等ナモノデハ一枚ノモアリ或ハ數枚癒合シテ共ニ完全ニ子房ヲ作クツテ居ルガ下等ノ植物デハソノ心皮ガ單ニ一枚ノ鱗狀ヲナシテ居ルニ過ギヌガ更ニ松杉ノ屬スル裸子植物ノ内デモット下等ト考ヘラレル植物即チそてつ、いてふノ如キモノニナルトソノ心皮ハダンダンニ普通ノ葉ニ似テ來ル

固ト固ト植物ノ花瓣トカ萼トカ雄藥、雌藥ナドハ葉ト同一ノモノトシテ考ヘル人モアルノデ花瓣、萼、雄藥ハ大抵各自ガ一枚ノ葉ニ相等シ雌藥ダケハ植物ノ種類ニヨリ一枚ノモアレド又三枚トカ五枚トカガ癒着シテ居テ子房ヲ二心皮、三心皮、或ハ五心皮カラ成ツテ居ルト稱フルガコノ心皮一枚ハ即チ一枚ノ葉ト考ヘテヨイワケデアル

葉ニ對應シテキル心皮（花ノ場合特ニ心皮ト云フ）ガ從ツテ時トシテ葉ト同ジ色ヤ形ヲ呈スルノモアリ得ル事下山ノ御葉付き銀杏ハ即チソレデアル從テコレヲ或ハ復歸現象即チ先祖返リダトモ言フ人モアル（理學界ニ記載サレタ理學博士山内繁雄氏）、又學說ノ上ヨリ復歸現象ヲ否定スル時ニハコレヲ一ツノ形質ト考ヘテ遺傳スルモノト考ヘルカ或ハ病的トカ畸形トカ或ハコレヲ木ガ老熟シタ時ニノミ現ハレルト考ヘレバ老樹相ト云フ様ニ

色々説明が出来ル譯デアル、イヅレモ見方又ハ考へ方デアツテ事實ハドコマデモ同ジテアル、總ジテ科學者ノ説明ノシカタハ獨斷的、主觀的ニ陷リヤスク、ワケノワカラモノヲ研究スレバ必ズ何トカこじつけネバ氣ガスマン様デ無理ニ理由ヲツケル事ガ多イ、私ハ曾テ一度ビハコレヲ老樹相トシテ考へタコトモアツタガ日本全國ノ老公孫樹ハ下山村以外ニ數十本アル、本多靜六博士ノ著日本老樹名木誌ニハ九十六本ノ公孫樹ガ記載セラレ多クハ下山村ノヨリ老木デ而モ葉上ノ銀杏形成ナドハ無イノデ其後間モナクドウモ老樹相トシテ考ヘルノ非ナルヲ知ツテ私ノ知人ナドヘモ其話ヲシタ事ガアツタガソレハ今カラ可ナリ以前ノ事デアツタ、右本多博士ノ同書ノ公孫樹ノ項ノ最後ニ鳥取縣（因幡國）八頭郡賀茂村ノ祖師堂ニ葉公孫樹トシテ樹齡三十四年ニテ「葉上ニ實ヲ結ブモノニシテ一名葉成リ公孫樹ト稱ス同村三好某ノ甲州身延山參詣ノ時白夫天神ノ毒消銀杏（四八八號）ト稱スル葉上ニ實ヲ結ブモノ、種子ヲ請受ケテ當地ニ蒔キシモノナリト云フ」トアル文ヲ見テ大ニ興味ヲ感ジ又我ガ説ノ證トナツタ事ヲ喜ンダ、カハル葉上ニ銀杏ヲ生ズル事ハ明ニ一ノ畸形的現象ナガラモ種子ニヨリテ遺傳スル形質ナル事ガ考へ得ラル、譯デアルカラコノ現象ヲ老樹ノ特性トナシ早急ニ老樹相ト断ヅルノ不當ナルハ明デアル

下山村ノ上澤寺ト本國寺並ニ同村ノ長谷寺、常福寺等ノ雌木並ニ八木澤村ノ雄木等イヅレモ同一系統ニ屬スベキ事ハ鳥取縣八頭郡ノ二木ノ關係ノ如カルベク唯疑問ハ三十年前ニ藤井博士ガ下山ノ公孫樹ノ枝ヲ切り東京ノ小石川植物園内ニ挿木セラシガ今日ナホ葉上ニ結實ヲ見ナイノハ是レ恐ラク挿木後未ダ開花期ニ達セザルモノト解スベク從ツテ遺傳的ニ決定的解決ヲ求メンニハ下山村ノ五木ト八頭郡ノ二木ト水戸ソノ他ノ種子ヲ各百個ヅ、モ蒔キ五十年ノ後即チ次ノ時代ノ植物學者ニ觀察ヲ依囑スルノ外ナキモノト考フル、勿論葉上ノ種子ハタゞ其ノ形骸ノミニテ内部ニ胚體ナキ故ニ同樹ノ普通ノ花ニ生ズル銀杏ヲ採リテ蒔クベキゴトハ言フマデモナイワケデアル

葉上ニ銀杏ヲ生ズル公孫樹トシテ調査セシモノヲ舉クレバ

○山梨縣下山村上澤寺境内●同村本國寺境内●同村常福寺●同村長谷寺●八木澤村某神社境内(雄木)

○茨城縣水戸市城趾茨城中學校庭●同市外常盤村八幡社境内

○滋賀縣醒井村大字本町三〇五了德寺境内

○鳥取縣八頭郡賀茂村字福本祖師堂境内●同郡大御門村字西御門仁王堂境内

○ KARL KOCH の見解を依る Dendrologie.

澤田武太郎

獨逸 Dendrologie の學史的研究を就テハ今ノ余トンテハ絶望的ナ問題デアル從ツル KARL HEINRICH EMIL KOCH (一八〇九年—一八七九年)ノ Dendrologie の學史上ニ於ケル位置を就テ論ズルコトハ全然不可能事ニ屬スル然シナガラ彼ノ一八六九年ヨリ一八七二年ニ亘リテ世ニ公ニサシタ Dendrologie ト表題セル三冊ニ卷ノ著作物ハ當時斯學ニ貢献ヲナスコト多大デアリシノミナラズソレガ斯學ノ發達ニ資シタリシコトハ彼ノ死後十年即チ一八八九年 LEOPOLD DIPPEL が Handbuch der Laubholzkunde. Erster Teil の記セル序 (Vorrede s. VI.) 中ニ次ノ如ク説カノタルリコリテヤ知ラシ得ル

……, bin ich vielfach von den Darstellungen C. Kochs in dessen Dendrologie (einem für die neuere Gehölzkunde grundlegenden, wenn auch—wie jedes Menschenwerk—von Fehlern und Mängeln nicht freien Werke) abgewichen wenn nicht mit denselben in Widerspruch geraten. Damit möchte ich aber die Verdienste, welche sich dieser Forscher durch dieses Werk um unseren Wissenschaftsgegenstand erworben hat, nicht im mindesten geschmälerst sehen. Für mich ist und bleibt C. Koch immerhin eine Autorität